
シーズンプリキュア!!

ターザン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーズンプリキュア！！

【Nコード】

N9806Z

【作者名】

ターザン

【あらすじ】

異世界に人間界の四季を安定させる4つの国があった。

しかし、その国は悪の組織『アラシン』によって支配され人間界の四季が不安定になった、不安定な四季はいつか世界を滅ぼしてしまう。

生き残った妖精は伝説の戦士プリキュアになる人間を探していた、そして早乙女夏樹、新川冬美と出会った。

2人は妖精の力を借りて四季を安定させ世界を守るため『アラシン』と戦う。

第1話 ええ！？私達が伝説の戦士！？

不思議な力がある4つの国が存在する異世界があった。その国は人間界の四季を作り出している。

一つはいつも晴天でポカポカとした優しい暖かさが広がり、満開の桜が咲き誇っている。そこは春の国『ハルル』。

一つは太陽が容赦なく暑い日光を照らし、水も干上がりカラカラになった砂漠が広がっている。そこは夏の国『ナーツ』。

一つは少し冷えこむ空気が吹き込み、綺麗な色の紅葉が木についていたり川に浮いていたり美しい光景が広がっている。そこは秋の国『アキン』。

一つは身も凍ってしまうような空気が漂い、毎日雪が降り注ぐがあちらこちらに雪だるまが作られている。そこは冬の国『フユーン』。

4つの国の住人は交流を深め、それぞれの季節に適した生活を送っていた。

.....

そんなある日…

夏の国『ナーツ』

??? 「王様～！！マーナ王様～！！」

一匹の黄緑色の妖精がナーツの王・マーナのところに来た。

マーナ「おお、サミー、来てくれたかマナ。」

それは夏の妖精・サミーだった。

マーナ「我が国『ナーツ』だけでなく他の3つの国にも異常事態が起こっているマナ。」

サミー「確かに最近、砂漠にもめったに降らない雨が3日連続で降り続いたりしているサミ……」

マーナは夏の国だけでなく春の国、秋の国、冬の国の異常事態についても話した。

マーナ「これは恐らく……」

その時

??? 「私達の仕業よ？」

サミー、マーナ「!?!」

そこには黒いローブを羽織った者がいた。
声や口調からして恐らく女だろう。

マーナ「お前達は『アラシン』マナ!?!」

??? 「あらら、私達も有名人になったのねえ。」

マーナ「やはり最近の異常事態はお前達の・・・」

???「ええ、他の国も私達の物にさせてもらったわ・・・あとはこの国だけ・・・まあもつともこの国に残ってるのはもうあなた達だけだね。」

マーナはサミーの耳元で囁いた。

マーナ「サミー、今すぐ国から出ていけマナ。」

サミー「な、何を言ってるサミ!？」

マーナ「3匹の妖精が人間界に降りたと聞いたマナ。」

サミー「で、でも・・・」

マーナはサミーを黄色の光球に包み込む。

サミー「王様!？」

マーナ「頼むマナ!! お前は夏の国の最後の希望マナ!!」

サミー「王様あああああ!？」

サミーは光球と共に国から消えた。

???「悲しい別れは済んだ?」

マーナ「まだ希望があるマナ、かつて4つの国の滅亡を防いだ伝説

の戦士・・・プリキュアが!!」

・・・・・・

人間界

草原に爽やかな風が吹き抜ける、そこにひとりの少女がいた。

その少女は赤黒い髪にポニーテールをしていた、そしてどこか寂しい雰囲気さおもめなつきを漂わせていた。

彼女の名は早乙女夏樹。

夏樹「私・・・ずっと一人なのかな・・・」

彼女はまだ知らなかった、いや知るよしもなかった。

ある少女との出会いが自分の人生を大きく変えることを。

・・・・・・

聖アマリリス学園中等部

夏樹は翌日いつも通り学校に通う。

教室ではいつも一人、特に嫌われているだとかイジメにあっているというわけではない、ただ単に影がうすいのだ。

担任「ほらあ、みんな席につけえ。」

教室内の生徒が全員席につく。

担任「今日から新しい仲間が増えるぞお。」

生徒が興味深々でざわめく。

夏樹（転校生かぁ・・・）

教室に転校生が入ってきた。

その転校生は紺色の髪でツインテールをしており妙なステップを踏んでいた。

??? 「ヤッホー！！私の名前は新川冬美^{あらかわふゆみ}！！よろしねえ♪」

生徒の中にはかわいいと言ったり戸惑っていたりする人達がいた。

担任「よし、お前の席は・・・早乙女の隣だ。」

冬美「は〜い♪」

冬美は夏樹の隣に移動する。

冬美「ん？」

夏樹「えっ？」

冬美は目を細め夏樹様じつと見つめる。

冬美「むむむむむむっ・・・」

夏樹「な、何？」

冬美「・・・うん、決めた。」

夏樹「えっ？」

冬美は夏樹に突然抱きついた。

冬美「決めたああ！！早乙女さんは今日から私の親友決定！！」

夏樹「えっ！？し、親友！？」

冬美「親友親友だああい親友ううう！！」

夏樹「ええええええええ！！？」

こうして夏樹の人生は180度変わった。

冬美「早乙女さん！！夏樹って呼んでいいよね？」

夏樹「い、いいけど・・・」

冬美「一緒にご飯食べよ？」

夏樹「う、うん。」

・・・

冬美「夏樹！！部活やってる？」

夏樹「や、やってない・・・」

冬美「一緒に帰ろう！！」

夏樹「い、いいよ・・・」

・・・

夏樹は今までにない経験ばかりで若干戸惑っていたが悪い気がしなかった。

夏樹（親友・・・か。）

そんなある日

冬美「うん・・・わかってるよお・・・」

???「本当に大丈夫ウイミ？」

冬美「大丈夫大丈夫、私を信じなさい。」

冬美は学校のあまり人が通らない場所でコソコソと何かと話していた、そこに

???「冬美？」

冬美「!？」

冬美は振り返った、そこには夏樹がいた。

夏樹「何・・・してるの？」

冬美は慌てて何かをカバンに押し込んだ。

冬美「な、夏樹♪どうしたの？」

冬美は慌てていた。

夏樹「何してたの？携帯で話してたわけでもなかったよね？」

冬美「な、何もしてないよ。」

夏樹「・・・なら・・・良いけど・・・」

その時

???「危ないウイミ!？」

夏樹「えっ？」

夏樹は謎の声に疑問を抱いたが突然何かに首を掴まれた。

夏樹「きゃあ!？」

冬美「夏樹!！」

夏樹の首を掴んでいるのは髪が白、目が赤、そして2メートル程の黒い体をした男だった。

夏樹「な、何この人!？」

???「妖精を渡せ小娘、さもなければこいつの命はない。」

冬美「夏樹・・・何よ!人質なんて卑怯じゃない!！」

??? 「黙れ。」

男は手に力を入れ夏樹を苦しめる。

夏樹「た、助け・・・」

男「ちっ、なんて弱い奴だ、力加減が面倒くさいな。」

男は夏樹を投げ飛ばした。

夏樹「きゃあ!？」

冬美「夏樹!!」

冬美は夏樹を何とか受け止めた。

夏樹「あ・・・ありがとう・・・」

冬美「夏樹、逃げるわよ!!」

冬美は夏樹の手を掴み走り出した。

夏樹「どうしてこんなに騒いでるのに他の人達は来ないのよお!!」

冬美「眠らされてるのよ!! あいつらにはそういう力があるから!
!それを学校全体に使ったんだと思う!! 私にはそれに対抗する力
があるから何とかなってるけど!!」

その言葉に夏樹は疑問を抱いた。

夏樹「え、だって・・・」

グラウンドに出たが既に男が先回りしていた。

冬美「しまった!？」

夏樹「いつの間に・・・」

男は口を開いた。

男「俺はアラシンの4幹部イナズンだぞ!! そんな俺から逃げられると思うな!! わかったら妖精をよこせ!!」

夏樹「ねえ!! アラシンとか妖精とかなんなのさあ!？」

冬美は黙っていた。

冬美（言えない・・・絶対に言えない・・・）

すると夏樹が

夏樹「もうわけわかんないよ!! みんな眠ってるのに私と冬美だけギンギンに目が覚めてるしい!!」

冬美「だから私には・・・あれ？」

冬美の脳内に? マークが浮かんだ。

冬美「そういえば・・・何で起きてるの?」

夏樹「ええ！？今さら！？」

そして冬美のカバンから妖精らしき生き物が出てきた。

???「ウイミ！！」

夏樹「ひい！？未確認生命体！？」

???「僕はウイミーだウイミ！！冬美、この子にも冬美と同じ力を感じるウイミ！！」

冬美「うつそおお！？」

夏樹「ねえねえ！！なんなのさあ！？」

するとイナズンが怒鳴りだした。

イナズン「いいつまでしゃべってるつもりだあ！！出てきたなら好都合！！力づくでも妖精を・・・」

???「サミイイイ！？」

どこからか妙な叫び声が響く、そして光球がイナズンの頭を直撃、その反動で夏樹の手に渡った。

夏樹「な、何これ！！」

光球が消えるとそれは夏の妖精サミーだった。

夏樹「み、未確認生命体二号ううう!?!」

サミー「はっ!?! 人間界についたサミ・・・ウィミー!?!」

ウィミー「サ、サミー!! 無事だったウィミー!?!」

夏樹は既に頭の中がこんがらがっていた。

夏樹「もうだめ・・・わけわかんない。」

冬美「夏樹!! 今は私の言う通りにして!! お願い!!」

冬美が夏樹の手を握る。

夏樹「ふ、冬美・・・」

いつもとは違う雰囲気を冬美は発していた。

夏樹「・・・わかった、どうすればいいの?」

冬美「夏樹・・・ありがとう!!」

するとウィミーが

ウィミー「サミー!! まずはシーズフォンになるウィミー!!」

サミー「わかったサミ!!」

ウィミーとサミーは何やらタッチパネルがついた水色と黄緑色の携帯機器のような物になり夏樹には黄緑色のもの、冬美には水色のもの

のが手に渡った。

夏樹「か、変わった!!」

冬美「これは私もびっくりだよお・・・」

イナズン「何を企んでいる!？」

イナズンは二人に向かって走り出した。

冬美「ウィミー!! どうすれば・・・」

ウィミー「パネルの水色のマークに触るウィミ!」

サミー「パネルの黄緑色のマークに!! そして二人は手を繋いで頭に浮かんだ言葉を叫ぶサミ!!」

夏樹「い、いきなり言われても・・・」

冬美「つてもう近い!？」

イナズンが走ってくるのに驚いた二人はとっさに親指でそれぞれのマークに触れ手を繋いだ。

イナズン「それをよこせええ!!」

二人はとっさにシーズフォンを真上に掲げ叫んだ。

「プリキュア!! スタートシーズン!!」

すると二人は水色と黄緑色の光に包まれた。

イナズン「な、何!？」

夏樹の周りには黄緑色の光が広がり腕、足、体はその光に身を包む。そして夏樹の髪はポニーテールがほどけ鮮やかに黄緑色にかわり頭には金のティアラがついた。

そして身を包んだ光が葉っぱとなり辺りに散らばると黄緑色で緑のラインのロングブーツにフリルのスカート、ヒラヒラした黄緑色の衣装、そして胸には赤い太陽のマークがついていた、シーズフォンへと姿を変えたサミーは左腕のポーチに入った。

一方冬美の周りには水色の光が広がり腕、足、体に雪の結晶を身にまとう。

そしてツインテールはそのまま残るが髪の色が水色になり金の髪留めがついた。そして雪の結晶が散らばると冬美は水色で白いラインの入ったロングブーツにフリルのスカート、少しふわっとした白い衣装、胸には白い雪の結晶のマークがついていた、シーズフォンに姿を変えたウィミーは腰についているポーチに入った。

イナズン「ま、まさか・・・奴らが!？」

夏樹「希望が照らす真夏の光!! キュアサマー!!」

冬美「勇気が起こす冬の吹雪!! キュアウインター!!」

「夏と冬のコラボレーション!! シーズンプリキュア!!」

う
う
へ

第1話 ええ!?! 私達が伝説の戦士!?! (後書き)

どうでしたか？

冬美のぶりっこキャラが自分でも妙な感じがしたのでぶりっこキャラについて教えてもらえると嬉しいです。

登場人物紹介

【伝説の戦士プリキュア】

キュアサマー
早乙女夏樹

聖アマリス学園中等部の生徒。

14歳

赤黒い髪でポニーテールをしている。学校では目立たなく影が薄い存在である。

夏の妖精サミーをパートナーに夏の戦士キュアサマーとなり戦う。

キュアウインター
新川冬美

聖アマリス学園中等部に転校してきたぶりっこ少女。13歳、紺色の髪でツインテール。

冬の妖精ウィミーをパートナーに冬の戦士キュアウインターとなり戦う。

【妖精】

サミー

夏の国『ナーツ』出身の黄緑色の体で緑の目、白い小さい羽をつけている猫のような夏の妖精。
ナーツの生き残り。

ウィミー

冬の国『フユーン』出身の妖精。

水色の体で青い目、白い小さい羽をつけている小熊のような冬の妖精。フユーンの生き残り。

他2匹の生き残った妖精がいるらしい。

【アラシン】

女首領

4つの国を支配している。

イナズン

アラシンの4幹部の一人。

第2話 行くよ!! 2人の力で本領発揮!! (前書き)

明けましておめでとうございます!!
今年もよろしくお願いします。

第2話 行くよ!! 2人の力で本領発揮!!

早乙女夏樹、新川冬美は伝説の戦士へと姿を変えた。

サマー「な、何これ!？」

ウィンター「すごおい!! 可愛い♪」

イナズン「あれが伝説の戦士プリキュア・・・」

イナズンは戸惑っている。

ただの少女が伝説の戦士へと姿を変えたからだ。

イナズン「だがたかが小娘・・・覚悟しろお!!」

イナズンは二人に向かって走り出した。

サミー（今サミー!!）

ウィミー「伝説の戦士の力を見せてやるウィミ！」

しかしサマーとウィンターはイナズンに背を向けて全力疾走をした。

サミー、ウィミー（えええええ!?!）

その行動にサミーとウィミーは愕然とした。

イナズン「待ちやがれえ!!」

サミー（何で逃げるサミー！？）

サマー「いきなり戦えって言われても戸惑うに決まってんでしょ！？」

ウィンター「こんな可愛い衣装汚したくない。」

ウィミー「あんたさっきの真剣さどこ行ったウィミ！？」

ウィンター「さあ？」

イナズン「逃げるのもいい加減にしろお！！」

イナズンがサマーの腕をつかむ。

サマー「ひい！？」

サマーがとつさにイナズンを振りほどき回し蹴りを叩き込む。

イナズン「ぐああ！？」

サマー「あ、あれ・・・私凄い・・・」

ウィンター「サマーったら凄おい！私もお！！」

ウィンターは側転、バク転、バク宙と繰り返しイナズンの後ろに回り込む。

イナズン「なっ！？」

ウィンターは軽くジャンプし両足でイナズンを蹴り飛ばした。

イナズン「ぐう！？油断した・・・ひとまず手を引くか。」

イナズンは一瞬にして姿を消した。

サマー「き、消えた！？」

ウィンター「とりあえず何とかなったねえ。」

2人は変身を解いた。

サミー「いやあ助かったサミー！！」

ウィミー「一時はどうなるかと思ったウィミ。」

冬美「お疲れ様あ♪」

すると

夏樹「ねえ！！今度こそ話してよ！！」

冬美「あわわ、忘れてたあ・・・放課後！！放課後ね？」

夏樹「もう・・・」

そしてあつという間に放課後になった。

夏樹と冬美は学校の裏で話をしていた。

夏樹「まずこの子達は？」

サミー「サミーだサミ!!!」

ウィミー「ウィミーだよウィミ!!」

冬美「2人は異世界から来たんだあ。」

夏樹「異世界?」

冬美「そう、私達の住む人間界とは別の世界、そこに4つの国があったんだって。ね?」

ウィミー「そうウィミ、その4つの国というのは人間界の四季を安定させているウィミ。」

夏樹「四季・・・じゃあ春とか秋とかってその国によって起こってるの?」

サミー「そうサミ!!!」

ウィミー「冬美と違って頭が良いウィミ。」

冬美「こらあ!!」

冬美はウィミーを捕まえ顔をつねる。

ウィミー「い、痛いウィミ!?!」

夏樹「続けて。」

サミー「わかったサミ。その4つの国はこの前、『アラシン』という異常気象を起こす悪の組織が現れて支配されてしまったサミ。」

夏樹「さっきの?」

ウィミー「そうウィミ、詳しくはわからないけど『アラシン』は4つの国で異常気象を起こして人間界をムチャクチャにしようとするウィミ、季節が乱れればいつかこの世界は破滅するウィミ。」

夏樹は腕を組み考え込む。

夏樹「つまり、私達がさっきみたいに変身して4つの国を救って世界の破滅を防げば良いのね。」

サミー「そうサミ、あれはサミー達の国に伝わる伝説の戦士プリキュアサミ。」

冬美「プリキュアっていうんだあ。」

夏樹「冬美は知らなかったの?」

冬美「詳しく聞いたのは今日が初めてなんだあ。」

サミー「お願いサミ!」

サミーとウィミーは2人に急接近し頼み込んだ。

ウィミー「世界を救えるのは君達プリキュアしかないウィミ!」

サミー「どうかこの通りサミ!」

夏樹はある事を考えていた。

夏樹（プリキュアとして戦えば・・・自分を変えられるかもしれない・・・まだ楽しい未来があるかもしれない！！）

夏樹は自分を変えるために、そして明るい未来を信じプリキュアとして戦う決意をした。

夏樹「私プリキュアとして戦うよ！！」

サミー「ありがとうサミー！！」

サミーは夏樹の胸に飛び込んできた。

一方冬美は

冬美（プリキュアかあ・・・さっきは生きるために真剣になっちゃったけど・・・でもなんか面白そう！！）

冬美は遊び半分でプリキュアになる事に決めた。
しかし後々その考えが変わる事になる。

冬美「じゃあ私もプリキュアになりま〜す♪」

ウイミー「それでこそ冬美ウイミー！！」

夏樹（さっきまであんなに真剣な表情してた冬美が・・・なんか妙だなあ。）

夏樹は変な違和感を覚えていた。

.....

その頃

??? 「全く、お前は妖精を捕まえる事すらできないの!?!」

イナズン 「も、申し訳ありません・・・突如プリキュアが現れて・・・」

??? は地団駄を踏む。

??? 「ムキイイ!! プリキュア!?! 名前を聞くだけでムシズが走るわ!! イナズン、他の幹部は来るのに時間がかかるらしいから貴様の力で今度こそ奴らを倒してきなさい!!」

イナズン 「はっ!! タイフンさま!!」

イナズンに命令した女はタイフンという名らしい。
イナズンは一瞬にして姿を消した。

.....

冬美 「とりあえず日が暮れてきたし帰ろ?」

夏樹 「う、うん。」

すると冬美が夏樹の手を握りしめた。

夏樹 「え!?!」

冬美「夏樹い！！明日休みの日だから遊ぼうね？」

夏樹「う、うん良いけど・・・」

冬美「やったあ！！じゃあ明日11時にあたしの家に来て！！」

夏樹「え！？でも家わかんない・・・」

冬美「そうなの！？じゃあ私が夏樹の家に行くよ！！」

夏樹「あたしの家わかるの？」

冬美「あ、そういえばわかんないやあ。」

冬美は笑顔でそう答えた。

夏樹「はあ。（疲れる。）」

・・・

翌日

夏樹「・・・っていうか結局待ち合わせ場所決めてないじゃん（汗）。メアドも聞いてなかったなあ。」

するとカバンの中からサミーが出てきた。

サミー「大丈夫サミー！！」

サミーがシーズフォンに変わる。

サミー「青いマークに触るサミ。」

夏樹「ここ？」

夏樹はタッチパネルの青いマークに触ると地図が表示され近くで反応した。

サミー「反応しているところが冬美の居場所サミ!!」

夏樹「うわぁすごい!!」

夏樹はシーズフォンを頼りに冬美を探す。

夏樹「反応が大きくなってきた。」

サミー「近くにいるサミ!!」

そして目の前の道の角を曲がると冬美がいた。

冬美「あれえ？夏樹どうしたのお？」

夏樹「どうしたのって・・・場所決めてなかったじゃない!？」

冬美「ああ!! そういうばそうだったねえ!! あたしったらうっかりちゃん♪」

夏樹「て、天然すぎだしぶりっこだなぁもう・・・」

夏樹が冬美に呆れていた。

2人はとりあえず近くの公園に向かった。

.....

公園

夏樹と冬美はコンビニで購入したアイスバーを食べながらベンチに座っていた。

冬美「それにしても私達が世界を救う伝説の戦士だなんてびっくりだよねぇ。」

夏樹「うん・・・できるかな・・・」

すると

??? 「悩む必要なんて無い。」

夏樹、冬美 「!?!」

後ろを振り向くとイナズンがいた。

2人は距離を取る。

サミー「イナズンサミ!?!」

ウィミー「ウィミー達を捕まえるつもりウィミ!?!」

イナズン「貴様達を倒して妖精を捕まえる!?!」

イナズンは何かを取り出した。
稲妻の形をしたシールだ。

夏樹「シール？」

冬美「何するのかなあ？」

イナズンは2人が座っていたベンチに貼り付けた。

イナズン「アクテンコーン！！でてくるがいい！！」

すると天候が突然悪くなり公園の周りの人々が眠りだしベンチに稲妻が落ちる。

夏樹「きゃあ！？」

冬美「べ、ベンチが！？」

ベンチは巨大になり手足が生え、鋭い目がつき、怪物へと姿を変えた。

アクテンコーン「アクテンコーン！！」

夏樹「怪物う！？」

冬美「おっきいねえ。」

ウィミー「感心してる場合じゃないウィミー！！」

サミー「変身サミー！！」

サミーとウィミーはシーズフォンに変わる。

夏樹「行くよ冬美!!」

冬美「おっけ♪」

2人は手をつなぎシーズフォンのマークを触り真上に掲げる。

「プリキュア!! スタートシーズン!!」

夏樹と冬美は光に包まれプリキュアに変身した。

サマー「希望が照らす真夏の光!! キュアサマー!!」

ウィンター「勇気が起こす冬の吹雪!! キュアウィンター!!」

「夏と冬のコラボレーション!! シーズンプリキュア!!」

サマーとウィンターは身構える。

イナズン「やれ!! アクテンコーン!!」

アクテンコーン「アクテンコーン!!」

アクテンコーンは拳でサマーとウィンターを襲うが二人は二手に分かれ飛び上がる。

サマー「ウィンター!!」

ウィンター「おっけー!!」

サマーはアクテンコーンの腕に乗り顔目掛けて走り抜ける。
ウィンターは素早く着地しアクテンコーンの足下に向かって走り抜ける。

ウィンター「はぁ!!」

ウィンターはアクテンコーンの足を蹴りつけアクテンコーンのバランスを崩す。

アクテンコーン「アクッ!？」

サマー「おりゃあ!!」

サマーはアクテンコーンを殴りつけ吹き飛ばした。

サマー「ナイス!!」

ウィンター「サマーもね♪」

イナズン「おのれ・・・アクテンコーン!!」

アクテンコーン「アクテンコーン!!」

アクテンコーンは立ち上がり目から光線を放つ。

サマー、ウィンター「ええ!？」

サマーとウィンターはまさか相手が光線を放つとは予測しておらず

光線に直撃してしまった。

サマー、ウィンター「きゃあ!？」

サミー「サマー!！」

ウィミー「ウィンター!？」

サマーとウィンターは何とか体勢を立て直すがアクテンコーンの猛攻が始まった。

2人はアクテンコーンの攻撃を避けるのに精一杯だった。

サマー「あぶなっ!？」

ウィンター「もう!!! 攻撃できない!!!」

そこに

イナズン「馬鹿め!！」

イナズンがいつの間にか2人の真上に飛び上がった。

サマー「しまった!？」

ウィンター「危ない!？」

イナズン「はああ!！」

アクテンコーン「アクテンコーン!！」

イナズンは真上から稲妻を、アクテンコーンは正面から光線を放つ。
2人はそれを直撃してしまった。

サマー、ウィンター「きゃあああああ!？」

サマーとウィンターはかなり吹き飛ばされた。
そして倒れたまま立ちあがれなかった。

イナズン「ふん、伝説の戦士と言えどこの程度か。」
すると

サマー（・・・ダメだ・・・やっぱり・・・私が伝説の戦士だなんて・・・バカみたい。）

イナズン「さあ、とどめだ!!」

イナズンが手をかざし稲妻を放つ。
2人は目をつぶる。

ウィンター（!!!!!!!!!!!!!!!!!!・・・あれ・・・）

サマー（何で・・・私達・・・無事なの・・・）

2人がふと正面を見ると信じられない光景が起こった。

サミー「サミイイイ!!」

ウイミー「ウイミイイイ!!」

なんとシーズフォンになっているサミーとウイミーがいつの間にかポーチから飛び出しバリアーで稲妻を防いでいたのだ。

サマー「サミー！？なんて事を！？」

サミー「プリキュアはサミー達の最後の希望サミー！」

ウイミー「ウイミー達が体を張って守るウイミー！」

しかし2匹の妖精のバリアには既に亀裂が走っていた。

ウィンター「ムチャクチャだよお！？」

ウインターはわからなかった、最後の希望といえど何故自分達を必死になって体を張るのか。

サミー「サミイイイ！？」

ウイミー「ウイミイイイ！？」

そしてついにバリアが破壊されてしまった。
シーズフォンとなった妖精は地面におちる。

サマー「サミー！？」

ウィンター「ウイミー！？」

サマーとウインターはサミーとウイミーに駆け寄る。

サマー「私・・・馬鹿だ・・・」

ウィンター「サマー？」

サマーは涙を流していた。

サマー「サミーは私達より全然小さいのに・・・私達を守ろうとして・・・」

イナズン「ふん、自分の事を考えもしないただの馬鹿だろ。」

ウィンター（・・・馬鹿・・・）

『なんか面白そう!!』

ウィンターは自分がプリキュアになった理由を思い出した。

ウィンター（妖精が傷ついて面白かったの？私は・・・目の前でこんなことが起こってるのに・・・馬鹿は私だ・・・だから!!）

サマー（こんな小さい体で私達を守ろうとしたサミー達を・・・）

イナズン「!？」

サマーとウィンターの発するとてもなく重いオーラにイナズンは思わず後ずさりをしてしまった。

サマー、ウィンター「バカにするなああああ!!!!!!」

イナズン「ぐう!?!何だこの力は!?!アクテンコーン!!」

アクテンコーン「アクテンコーン!!」

アクテンコーンが2人に近づくとサマーとウィンターは一瞬にしてアクテンコーンの懷に飛び込み思いっきり蹴り飛ばした。

イナズン「これはまずい!？」

イナズンは思わず撤退した。

アクテンコーン「アクッ!？」

サマーとウィンターはシーズフォンを手にとりポーチに戻る。

サミー「ウィミー!! 今なら!!」

ウィミー「できるかもウィミ!!」

サマー「できるって何が？」

サミー「2人とも手を繋ぐサミ！」

ウィンター「わかったわ!!」

サマーは左手、ウィンターは右手でそれぞれの指の隙間に指を入れ握りしめる。

サマー「あっ、頭に浮かんできた!!」

ウィンター「よおし!!」

サマーは右腕を左斜めに突き出し、ウィンターは左腕を右斜めに突き出しX字を作る、すると緑と青のエネルギーがたまる。

サマー「緑の夏の希望よ!!」

ウィンター「青の冬の勇気よ!!」

サマー、ウィンター「届け!! 2色の力!! プリキュア!! ダブル・シーズン!!」

二人は対方向に腕を大きく回し2つの円を作る。

サマー、ウィンター「ストリィィィム!!」

2人が手を前に突き出すと緑と青の光線が渦を作り放たれる。それがアクテンコーンに直撃した。

サマー、ウィンター「オーブン! ア〜ンド!! エンド!!」

サマーとウィンターがそれぞれ飛び上がりハイタッチをするとアクテンコーンに直撃したエネルギーが爆発しアクテンコーンは元のベッチに戻った。

.....

2人はサミーとウィミーをカバンに入れ夕暮れの道を歩いていた。

夏樹「私決めた!!」

冬美「夏樹?」

夏樹は何かを決意した。

夏樹「自分を変えるためにプリキュアになるんじゃないって・・・サミーみたいにこれ以上誰かを傷つけない・・・そうするためにプリキュアになる!!」

冬美「・・・・・・・・じゃあ私は・・・・・・・・夏樹を応援するためにプリキュアになるゝ!!」

冬美は夏樹に抱きつく。

夏樹「ち、ちよつとゝ!?!」

冬美「あははははは!!」

夏樹「もう・・・ははは!!」

2人はプリキュアとしての決意を固めた。

つづく

第2話 行くよ!! 2人の力で本領発揮!! (後書き)

実は脳内で声優さんをイメージして作ってるんですよ。

早乙女夏樹 CV伊藤かな恵

新川冬美 CV菊池美香

サミー CV竹達彩奈

ウィミー CV下野紘

タイフン CV能登麻美子

イナズン CV鈴木千尋
合ってるでしょうか？

第3話 ああ!!もうすぐ学園祭!!

夏樹と冬美は早朝、学校に向かっていた。

冬美「そういえばうちの学校って近々行事とかないのお?」

夏樹「行事?・・・ああ!？」

夏樹は目を大きく見開き叫んだ。

冬美「ど、どうしたのお?」

夏樹「来週学園祭だ!!」

サミー「学園祭?」

ウィミー「ウィミ?」

・・・

タイフン「きい!!なんなのよなんなのよ!!あんな
本当に4幹部の1人なわけ!？」

イナズン「も、申し訳ありません!!」

イナズンはタイフンに説教されていた。
プリキュアを倒す使命に失敗したからだ。

タイフン「あんなね!!アクテンコーンは1人4回しか使えないの

よ!?!それを1回無駄にして・・・なんか言ったらどうなの!?!」

イナズン「も、申し訳ありません!!!」

イナズンはただただ頭を下げるしかなかった。

タイフン「・・・いいわ、さっさと奴らをコテンパンにしてきなさい!!そして妖精を捕まえてきなさい!!」

イナズン「は、はっ!!!」

・・・

聖アマリリス学園中等部

学校内は学園祭の準備で騒がしくなっていた。

冬美「ねえねえ夏樹。」

夏樹「何?」

冬美「学園祭一週間前なのに何で今まで準備してなかったの?」

夏樹「なんか・・・まったらした学校なの、うち。」

冬美「へ、へえ(汗)」

そんな2人をこっそり見ていた者がいた。

???「ふむ、一週間後は何やら賑やかな事が始まるのか・・・そ

の時に学校の奴らを人質に・・・」

すると

??? 「あのゝ・・・」

??? 「あれをこうして・・・ああ!？」

それを見ていた茶髪で三つ編みの1人の女子学生がいた。

??? 「あなた先生ですか？」

??? 「え!?! あの・・・そうそう私は稲妻先生、祭りの準備頑張ってくれたまえ!!!」

わかってると思うが稲妻先生は変装したイナズンである。
イナズンは全速力で学校から出て行った。

??? 「稲妻先生?」

そしてそこに

??? 「秋子!!」

金髪でショートカットのボーイッシュな女子学生が来た。

秋子「ああ、春。」

茶髪で三つ編みの女子学生は国栄秋子、聖アマリリス学園の生徒会長である。

金髪でショートカットの女子学生は神坂春、みさかしゅんスポーツ万能で頼りがある人物。

2人とも学校内では人気者である。

春「今の人誰？」

秋子「稲妻先生だって。」

春「い、稲妻先生？」

・・・

その頃、夏樹と冬美は学園祭の準備をしていた。
どうやら旗を作っているらしい。

夏樹「冬美、青色取って。」

冬美「おっけ〜♪」

2人は着々と旗の色ぬりを進めていく。

生徒「ねえねえ、早乙女さんと新川さんって仲良いよね。」

生徒「なんか、新川さんのおかげで早乙女さんが際立ってるよね。」

夏樹は知らない間に生徒に注目されていた。

夏樹「ここは・・・」

冬美「夏樹、そこは緑だよ。」

夏樹「あ、危ない・・・ありがとう冬美。」

冬美「どういたしましてえ♪ナイスだよ私♪」

そんな感じで日数がたち学園祭前日。

夏樹がシーズフォンの機能を調べていた。

夏樹「变身だけじゃなくてメールもできるんだ。」

サミー「便利サミ?」

夏樹「便利すぎて十分だよ・・・あ、冬美からメールだ。」

冬美からメールがきた。

『明日は学園祭♪夏樹い、興奮して眠れないでしょう? (´∀｀)
話によると夏樹けっこークラスの人達に見られてたよ!!ちよつと
嫉妬(;、皿、) なくんてね♪明日楽しもうね!!じゃバイQ♪
』

夏樹「お、恐るべし冬美スタイル・・・すっかりペースにのまれちゃう・・・。」

しかし若干嬉しさもあった。

夏樹「そういえば冬美に会ってから学校が楽しく感じてる気がする・・・私もいつの間にか変わってたのかな・・・。」

『明日楽しもうね!!』

夏樹は冬美のメールの言葉を思い浮かべる。

夏樹「ありがとう、冬美。」

・
・
・
・
・
・

翌日

上空に花火がいくつか上がる。

生徒「いらっしやいませ〜!!」

アマリリス学園の学園祭が始まった。

模擬店やクラス展示や色々な出し物を行う。

夏樹「いらっしやいませ〜!!」

冬美「違う違う!!」笑顔も固いしメイドは『いらっしやいませご主人様♪』だぞお!!」

夏樹と冬美のクラスではメイド喫茶を出し物にするらしい。

夏樹（くそお悔しいけど可愛いんだよなあ冬美。）

冬美に嫉妬する夏樹。

冬美「さあて夏樹!!」どおやら接客は無理なようね〜・・・じゃあコンビニでおやつ買ってきてえ♪」

夏樹「あ、はい。（何故か断れない。）」

夏樹は近くのコンビニに向かう。

夏樹「えーと確かコーラとクッキー・・・ん？」

突然シーズフォンとしてポケットに入れていたサミーが元の姿でポケットから出てきた。

夏樹「サミー？」

サミー「学校から変な気配がするサミー!!」

夏樹「へんな気配？」

サミーは再びシーズフォンになり夏樹のポケットに戻る。

夏樹「とりあえず・・・学校に・・・」

夏樹は学校に向かって走る。

・・・

冬美「きゃあ!？」

冬美は足下に稲妻がおち転んでしまった。それはイナズンによるものだった。

イナズン「さあ、こいつらがどうなってもいいのか？」

イナズンは眠ってしまった生徒、学園祭の客に向かって手をかざす。

冬美「なっ、やめて!!! 何考えてんのよ死んじやうじゃない!?!」

イナズン「はあ? 別に死んだって構いやしないだろ。」

イナズンは眠っている生徒会長の秋子とその友達の春の首をつかみ持ち上げる。

冬美「やめて!?!」

ウィミー「冬美落ち着くウィミ!」

イナズン「やめてほしいのなら妖精をよこしな。」

冬美「そんな・・・」

イナズンは手に力をいれはじめる。

つかまれている二人は眠っているとはいえ苦しそうな表情を浮かべる。

冬美「やめて!!! やめて!!!」

その時

イナズン「ぐあ!?!」

突如2つの光がイナズンに直撃、イナズンは手をはなした。
そしてその2つの光は秋子と春の体の中に入った。

冬美「なっ・・・何？今の・・・」

???「冬美い!!」

夏樹が学校に戻ってきた。

冬美「夏樹!!」

イナズン「ぐっ・・・今のは一体・・・」

夏樹「なんかよくわかんないけど行くよ!!」

冬美「うん!!」

二人はシーズフォンのタッチパネルに触れ手をつなぎシーズフォンを真上に掲げ叫んだ。

「プリキュア!! スタートシーズン!!」

光に包まれ二人はプリキュアに変身した。

サマー「希望が照らす真夏の光!! キュアサマー!!」

ウィンター「勇気が起こす冬の吹雪!! キュアウィンター!!」

サマー、ウィンター「夏と冬のコラボレーション!! シーズンプリキュア!!」

イナズン「プリキュア、今度こそお前たちを倒す!!」

イナズンは稲妻のシールを取り出す。

イナズン「出てくるがいい！！アクテンコーン！！」

イナズンは学園祭の出し物のクマの模型にシールを貼り付けアクテンコーンを作り出した。

サマー「みんなが頑張って作った物になんてことしてんのよ!？」

イナズン「黙れ!そんなもの知るか!!やれアクテンコーン!!」

アクテンコーン「アクテンコーン!!」

その時、イナズンやサマー、ウィンターは気づいていなかった。眠っているはずの秋子と春の指がかすかに動いたことを。

アクテンコーン「アクテンコーン!!」

アクテンコーンは拳を振り下ろす。サマーとウィンターはそれをおかし2人はアクテンコーンにとびかかる。

サマー「はっ!」

サマーはアクテンコーンを蹴りつけるがアクテンコーンはそれを両腕で防ぐ。

サマーは足をバネのように反動をつかい後ろに跳ね返りそこからウィンターがアクテンコーンを殴りつける。

ウィンター「うりゃあ!!」

アクテンコーン「アクッ!?!」

アクテンコーンは倒れ込む。

ウィンター「さあ次はあんたの番よ!」

ウィンターはイナズンを襲う。

サマー「アクテンコーンは私がなんとかするわね!?!」

ウィンター「おっけ!?!」

ウィンターはイナズンに蹴り殴りを連続で繰り出す。

ウィンター「たあ!?!はあ!?!」

イナズン「貴様らにコケにされた屈辱晴らさせてもらおうぞ!」

イナズンはウィンターの猛攻撃を軽々とかわし首をつかむ。

ウィンター「うぐっ!?!」

ウィンターはもがくがどんどんイナズンの手の力が強くなる。

ウィンター「ぐっ・・・」

イナズン「このまま死ね!?!」

しかし

ウィンター「ぐっ・・・なあってね♪あまいよ。」

イナズン「なに!？」

すると突如つかんでいるウィンターが砕け散った。

イナズン「ま、まさか!？」

ウィンター「ここだよ。」

いつの間にかウィンターがイナズンの後ろでイナズンの背中に手をつけていた。

ウィンター「プリキュア!!アイス・ショット!!」

ウィンターの手から氷の塊が放たれイナズンを吹き飛ばした。

イナズン「バカな・・・」

ウィンター「よく出来てたでしょ?私の氷♪」

イナズンがつかんでいたのはウィンターが身代わりに一瞬で作った氷のダミーだった。

ウィンター「さあて、学園祭をめっちゃめっちゃにしてくれた恨み晴らさせてもらうでえ!!」

いきなり関西弁になり再び猛攻撃が始まるウィンター。
一方

サマー「だあ!!」

サマーはアクテンコーンの攻撃をかわしながら蹴りをいれる。

アクテンコーン「アクテンコーン!!」

アクテンコーンは大きく腕を振り回し攻撃を試みるがサマーは飛び上がってかわしアクテンコーンの目の前まで接近する。

アクテンコーン「アクッ!」

サマー「リーフィンパクト!!」

サマーの手から巨大な葉っぱが放たれアクテンコーンを吹き飛ばした。

アクテンコーン「アクテンコーン!」

サマー「……ってウィンターと一瞬じゃないとアクテンコーン倒せないじゃない……ウィンター!!」

サマーはウィンターの方を見るとウィンターはイナズンに圧倒されていた。

サマー「なっ……何で!」

するとアクテンコーンがサマーをつかみだす。

サマー「きゃあ!」

サマー（な、何で・・・さっきまであんなに・・・）

そう、さっきまでウィンターの方がイナズンを圧倒していたが何故か立場が逆になっていた。

ウィンター「卑怯・・・者・・・」

イナズン「ふん、それは誉め言葉として受け取っておこう。」

イナズンは眠っている学生に攻撃をしようとしていた。

イナズンは懲りずにまた人質をとっていた。

ウィンター（どうする・・・どうするのよ私・・・）

ウィンターは頭を抱えて悩み込む。

サマー「きゃあああああ！？」

ウィンター「サマー！？」

サマーはアクテンコーンに握りつぶされそうになった。

イナズン「ほら、この人間と仲間を助けてほしいなら変身を解いて妖精をよこせ。」

ウィンター「この・・・」

サマー「きゃあああああ！？」

ウィンター「！？」

ウィンターは頭を抱えて悩み込む。

人質である学生とサマーはサミーとウィミーを差し出せば助かる。だがそれと同時に世界は破滅する道を辿ってしまう。逆に妖精を渡さなければ人質が殺されてしまう。

ウィンター「どうすれば……どうすれば……あ……」

ウィンターは何かを思い出した。

ウィンター「これを……こうすれば……」

イナズン「何をしている！？……さてはさっきの水でダミーを作る気だな？そんな事すればこいつらの命がないぞ！？」

ウィンターはウィミーの耳元で囁く。

ウィミー「わかったウィミ。」

ウィンター「行くわよ……望み通り渡すわ。」

ウィンターはシーズフォンをイナズンに投げ渡す。

イナズンはシーズフォンを手にとる。

イナズン「……」

ウィンター「今だ！！」

ウィンターはポーチからもうひとつのシーズフォンを取り出す。

イナズン「やはりな!!」

イナズンは手に持っているシーズフォンを投げ捨て稲妻をウィンターに向かって放つ。

ウィンター（かかった!!）

するとウィンターはシーズフォンを投げ捨て稲妻をかわしイナズンが投げ捨てたシーズフォンを手に取り出すアクテンコーンを蹴り飛ばした。

アクテンコーン「アクテンコーン!？」

サマー「うわっ!?!ウ、ウィンター!?!」

サマーはアクテンコーンの手から逃れた。

ウィンター「成功♪」

イナズン「貴様!?!まさか!?!」

サマー「ウィンター何したの?」

ウィンター「解説しなきゃね。」

そう、ウィンターがイナズンに渡したのは妖精が姿を変えた本物のシーズフォンだった。しかしイナズンは先ほどウィンターが身代わりに使った自分の氷の分身の事で警戒心が生まれていた、そこでウィンターはその裏をかいだ。本物のシーズフォンを渡した後ウィンターが偽物のシーズフォンを取り出した事でイナズンはウィンター

が持っているのが本物のシーズフォンと錯覚したのだ。

ウィンター「本物だと見極められないなんてまだまだだね♪」

イナズン「おのれ!!!」

イナズンは完全にキレた、そして稲妻を二人に向けて放とうとする。

ウィンター「サマー!!!」

サマー「プリキュア!!!フラッシュシャイニング!!!」

サマーは両手から眩い光を放ちイナズンを攪乱する。

イナズン「うわぁ!?!」

イナズンは目を手で押さえつけ膝をつく。

サマー「よおし!!!今だ!!!」

2人は手をつなぎそれぞれ必殺技の体勢にはいる。

サマー「緑の真夏の希望よ!!!」

ウィンター「青の冬の勇気よ!!!」

サマー、ウィンター「届け、2色の力!!!プリキュア!!!ダブル・シーズン!!!」

イナズン「ア、アクテンコーン!?!俺をかばえ!!!」

アクテンコーン「アクテンコーン!!!」

サマー、ウィンター「ストリィィィム!!」

2色の光線がアクテンコーンを襲う。

アクテンコーン「アクッ!？」

サマー、ウィンター「オープン!!ア〜ンド!!エンド!!」アク
テンコーンは元の模型に戻った。

イナズン「くそお!？」

イナズンは姿を消した。

・・・

生徒「ありがとうございました〜!!」

生徒「みんなあ!!盛り上がっていくぜえ!!」

生徒「イエ〜イ!!」

学園祭は何事もなかったように盛り上がっていた。

冬美「色々あったけど大成功だね〜♪」

夏樹「うん、でも冬美って案外頭良いよね。」

冬美「ああ、さっきの作戦?かなり一か八かだったけどね〜・・・
それより案外ってどういうことかなあ?」

夏樹「ええ！？いや・・・」

夏樹は突如逃げ出した。

冬美「こらあああ！！」

冬美は夏樹を追いかける。

冬美「まちなさあい！！」

つづく

第4話 これだ!!プリキュアの新たな力!! (前書き)

各話の誤字脱字を訂正しました。

第4話 これだ!!プリキュアの新たな力!!

夏樹「自立しよう!!」

冬美「ど、どうしたの お急にい? (汗)」

休日、夏樹が冬美を家に呼び出した。

冬美が来るなり思いつき顔を近づけて

夏樹「自立しよう。」

というわけだ。

冬美「な、何で自立なのお?」

夏樹「この間の戦いでさ、なんとか冬美の提案で難を逃れたけど・
・私達アクテンコーンを倒すには2人じゃないと無理じゃん?」

冬美「まあ確かにねえ。」

するとサミーとウィミーが言い出した。

サミー「確かに変身も2人じゃないと出来ないサミ。」

ウィミー「それぞれが新しい力を手に入れるべきウィミ。」

冬美「でも突然言われてもなあ。」

すると

サミー「そういえば『ナーツ』に伝わるプリキュアの伝説に『夏の戦士、真の希望を手にした時、新たな力が生まれる。』っていうのがあったサミ。」

夏樹「それだ!!」

ウィミー「そういえば『フユーン』にも・・・『冬の戦士、真の勇気を手に入れるとき新たな力が生まれる。』っていうのがあったウィミ。」

冬美「まだ力があるんだあ。」

夏樹「あごに手を当て考える。
そして

夏樹「よし!!学校アンケートで希望を集めよう!!」

冬美、サミー、ウィミー「いやいやいや!!?」

・・・

異世界

タイフン「ムツキイイ!!?あんた本当に使えないわねもお!!」

イナズン「も、申し訳ありません!」

イナズンはまたもやタイフンに叱られていた。

タイフン「何度何度何度何度負けたら気がすむのよお!？」

そこに

???「遅れました。」

イナズン、タイフン「!？」

2人の後ろに三人の異様なオーラを出した戦士がいた。

タイフン「きたあああああ!!きたきたきた!!待ちわびてたわよお!!」

ひとりは秋の国『アキン』を支配する女戦士・スコール。

その姿は髪は白い長髪でロール型になっている。そして体はイナズンと同じように黒いが手足と目はは橙色をしている。戦闘能力は4人のメンバーの中でもっとも低いが頭脳はNo.1。

「ちょっと、何見てんのよイナズン。」

イナズン「い、いや何でもない・・・」

もう一人は冬の国『フユーン』を支配する男戦士・サイクル。

手足と目は緑色で白い短髪、イナズンほどがっちりとした体型ではないが素早さは4人のメンバーでNo.1。

サイクル「おいおい、聞いたぜ?連戦連敗だって?」

イナズン「だ、黙れ!？」

もう一人は春の国『ハルル』を支配する男戦士・モーシヨン。手足と目は赤く、ギザギザとした形をした白い髪であり、体型はいたって普通だが実力はメンバー4人の中でNo. 1。

モーシヨン「大丈夫だよ、お前はよくやっているよイナズン。」

イナズン「モ、モーシヨン!？」

タイフン「モーシヨンはイナズンに優しいな。」

モーシヨン「お願いしますタイフン様、今一度イナズンにチャンスを与えてあげられませんか？」

タイフン「お前がそう言うなら良いだろう。イナズンはお前にまかせたぞモーシヨン。」

イナズン「すまない、モーシヨン。」

モーシヨン「気にするな。(存分に働いてもらうぞ。)」

.....

夏樹と冬美はとりあえず夏樹の家で勉強をしている。

夏樹「えーとXⅡ2だから・・・こうか。」

冬美は夏樹のその姿をじっと見ていた。

夏樹「な、何？」

冬美「夏樹って頭良いよねえ。」

夏樹「そ、そう?・・・あれ、これさっきと同じ問題・・・」

夏樹はいつの間にか先ほどと同じ問題をやっていた。

夏樹「何で・・・ってこれ冬美のじゃん!？」

冬美「あちゃー、ばれたあ。」

サミー「冬美は甘えん坊サミ。」

ウイミー「まったくウイミ。」

夏樹「もう・・・ちよつと喫茶店でも行く?」

冬美「行く行く♪」

2人は勉強を一時中断し近くの喫茶店に行った。

喫茶店

夏樹「あの席にしよう・・・あっ・・・」

夏樹は少し驚いた顔をした。その目線の先をみる冬美。

そこには学校で有名な生徒会長の秋子、スポーツ万能の春がいた。

冬美「おお、アマリリス有名人!!」

春「変なあだ名つけるな!!」

秋子「まあまあ春、落ち着いて。」

夏樹は少し緊張した雰囲気を出していた。

夏樹「まずいまずい！！同年といえどもあんな有名人と同じ喫茶店にいるなんて気まずいよ！！」

すると

秋子「早乙女さん？まさか緊張してる？」

夏樹「は、はい！！・・・ってあれ？何で私の事知ってるんですか！？」

夏樹は驚いた。

なぜ聖アマリス学園の有名人が影の薄い自分を知っているのかと。

春「なんか何で私の事知ってるのって顔だね。」

夏樹「だってそうじゃないですか！！私スッゴい超がつくほど影が薄くて・・・」

すると

秋子「え？あなた結構有名人よ？」

春「学校一のぶりっちゃんと超仲が良い人って・・・たぶんうちのクラス知らない人いないよ？」

夏樹「えええええ！？」

・
・
・
・
・

その日から夏樹と冬美は秋子、春と気軽に話せるようになった。
その時、夏樹と冬美のカバンに隠れているサミー、ウィミーは疑問を抱いていた。

サミー（ふ、不思議な感じサミ。）

ウィミー（何かを感じるウィミ。）

・
・
・
・
・

数時間後

夏樹と冬美は秋子、春と別れ帰り道を歩いていた。

冬美「いやぁ意外と2人とも可愛かったねえ、私の方が可愛いけど」
♪

夏樹「あのねえ（汗）」

すると夏樹の足下に何かが落ちた。

夏樹「ん？紅葉だ。」

冬美「え？なんで！？今夏だよお！？」

カバンからサミーとウィミーが出てきた。

ウィミー「『アラシン』の仕業ウィミー!!」

夏樹「『アラシン』の?」

サミー「そうウィミー!! ついに季節を狂わせ始めたサミー!!」

冬美「でもなんかしょぼいねえ、夏に紅葉なんて。」

ウィミー「まだ『アラシン』が4つの国の力を使いこなせてないウィミー、でもそれも時間の問題ウィミー!!」

すると

???「その紅葉は冥土の土産にとっておけ!!」

夏樹、冬美「その声は!?!」

その声はイナズンだった、だが姿が見当たらない。
ふと空を見上げると

イナズン「プリキュアアアアア!!」

夏樹、冬美「きゃあああああ!?!」

空からイナズンが降ってきたのだ。
なんとか二人はイナズンを避ける。
イナズンは上手く着地する。

イナズン「今日こそ妖精を渡せ!!」

夏樹「誰が渡すもんですか!?!行くわよ!?!」

冬美「オツケ!?!私もしつこい人は大嫌いよお!?!」

サミーとウィミーはシーズフォンに変わり、二人はシーズフォンを手にとり手を繋ぐ。

「プリキュア!?!スタートシーズン!?!」

2人は光に包まれて姿を変えた。

サマー「希望が照らす真夏の光!?!キュアサマー!?!」

ウィンター「勇気が起こす冬の吹雪!?!キュアウィンター!?!」

サマー、ウィンター「夏と冬のコラボレーション!?!シーズンプリキュア!?!」

イナズン「今日の俺は一味二味違うぞ!?!」

イナズンは稲妻のシールを二枚取り出した。そしてそれを季節の乱れによって出来た紅葉がついている木に貼り付ける。

イナズン「さあ来い!?!アクテンコーン!?!」

紅葉の木はアクテンコーンに姿を変えた。シールを二枚もつけたせいか力がいつもの倍になっていた。

サミー「今までのより強いサミー!?!」

ウィミー「気をつけるウィミ!!」

サマー「行くよウィンター!!」

ウィンター「おまかせなっさ〜い!!」

サマーはアクテンコーンの攻撃を避け飛び上がり顔の目の前まで接近する。

サマー「プリキュア!!フラッシュシャイニング!!」

サマーはシャインフラッシュでめくらましをさせようとしたがアクテンコーンはそんなサマーを叩き落とした。

サマー「きゃあ!?!」

ウィンター「プリキュア!!スノーマイン!!」

ウィンターはスノーマインで氷で出来た自分の分身を3体作る。

ウィンター「プリキュア!!アイスショット!!」

ウィンターは氷の塊を放つ。

分身からも氷の塊が放たれる。

アクテンコーン「アクテンコーン!!」

しかしアクテンコーンはアイスショットを碎き分身もろともウィンターを襲った。

ウィンター「きゃあ!？」

イナズン「ははは!! 凄いぞアクテンコーン!!」

アクテンコーン「アクテンコーン!!」

イナズンは倒れている2人に手をかざす。

イナズン「さあ、妖精を渡せ。」

サマー「誰が・・・渡すか!!」

サマーは起き上がりイナズンに向かって蹴りを放つ。

イナズンはそれを避ける。

イナズン「おっと・・・強情な奴め。」

サマー「ウィンター、立てる？」

ウィンター「なんとかね・・・」

ウィンターも起き上がる。

アクテンコーン「アクテンコーン!!」

アクテンコーンは両手から稲妻を放つ。

イナズンも両手から稲妻を放つ。

サマー「ウィンター!!」

ウィンター「うん!!」

サマーとウィンターは手をつなぎ必殺技の体勢にはいる。

サマー「緑の真夏の希望よ!!」

ウィンター「青の冬の勇気よ!!」

サマー、ウィンター「届け!! 2色の力!! プリキュア・ダブルシーズンストリーム!!」

サマーとウィンターはダブルシーズンストリームで稲妻に対抗するが一瞬で押し返されてしまった。

サマー、ウィンター「きゃあああああ!?!」

サマーとウィンターは吹き飛ばされた。

イナズン「ははははは!! やつとだ!! やつと任務を達成できる!!」

イナズンはサマーとウィンターはもう立ち上がれないと思い2人に近づくがなんと二人は立ち上がった。

イナズン「何!?!」

アクテンコーン「アク!?!」

サマー「……絶対渡さない……私達が世界の最後の希望なら……」

・私達は世界のために何度だって立ち上がる!!」

ウィンター「そうだよ・・・私達には世界を守るためなら・・・いくらでも勇気を振り絞る!!」

その時、シーズフォンが輝きだした。

イナズン「な、何だ!? この輝きは!？」

サミー「サマー!! ウィンター!! 新しい力が目覚めたウィミ!!」

サマー「ほ、本当!？」

ウィミ「シーズフォンの新しいマークに触れるウィミ!!」

ウィミ「わかった!!」

シーズフォンには新しい金色のマークがあった。
二人はそれに触れる。
するとシーズフォンに変化が起きた。

サマー「シ、シーズフォンが!？」

ウィミ「か、変わってくう!？」

サマーのシーズフォンから金色の持ち手に赤い刀身のサマーファイピアが出現、ウィンターのシーズフォンからは先に青い水晶がついた金色の杖のウィンタースノッドが出現した。

サマー「うわあ!! 剣だ剣!!」

ウィンター「魔女っ子♪魔女っ子ウィンター♪」

イナズンは戸惑っている。

イナズン「こしやくなあ!!」

イナズンは手から稲妻を放つ。

サマー「うわあ!?!またあ!?!」

サマーはとっさにサマーファイピアで円を描くと赤いバリアが出現し稲妻を跳ね返す。

イナズン「ぐあ!?!」

アクテンコーン「アク!?!」

サマー「す、すごい・・・」

サミー「さすが新しい力サミー!!」

ウィミー「ウィンターもやるウィミー!!」

ウィンター「よおし!!」

ウィンターはウィンタースノッドを天に掲げアクテンコーンに突き出す。

すると青い光線が放たれた。

アクテンコーン「アクテンコーン!？」

アクテンコーンは吹き飛ばされた。

ウィンター「やった!!」

イナズン「くそ・・・くそお!!」

イナズンは姿を消した。

ウィミー「必殺技をそれぞれだせるウィミ!!」

サミー「頑張るサミ!!」

サマー「行くよウィンター!!」

ウィンター「新必殺技行きます!!」

サマーはサマーファイピアの持ち手にあるスイッチを押す、すると赤い刀身に炎が発せられる。

ウィンターはウィンターズノッドにあるスイッチを押す、すると杖の青い水晶が青く輝きだす。

サマー「プリキュア!!ソーラーアタック!!」

サマーがサマーファイピアを振ると刀身から炎の球体が放たれた。

ウィンター「プリキュア!!ブリザードスプレッド!!」

ウィンターがウィンターズノッドを突き出すと青い水晶からブリザ

ードが放たれた。

アクテンコーン「アク!？」

アクテンコーンは炎に包まれさらにブリザードを直撃、アクテンコーンは消滅した。

サマー「スッゴい・・・あのアクテンコーンを倒しちゃった・・・」

ウィンター「魔女っ子ウィンター事件解決♪」

サミー「これでもし2人が離れ離れでも『アラシン』に対抗できるサミー!」

ウィミー「変身してたらウィミ。」

サマーとウィンターは新たな力を手に入れ『アラシン』に対抗する力を着々とつけていた。

だが『アラシン』も季節を乱そうと戦力を整えているのだ。

つづく

第5話 あれは!?! 違う幹部が現れた!! (前書き)

今回は短め

第5話 あれは！？違う幹部が現れた！！

タイフン「呆れてものも言えないわ。」

イナズンはついにアクテンコーンをつくるシールを使い果たし、そしてプリキュアを倒せなかった。

モーション「イナズン、元気を出せ。」

イナズン「申し訳ありませんタイフン様、すまないモーション、お前がくれたチャンスをいかせなかった。」

サイクル「まあよく頑張ったんじゃない？」

スコール「次からは私がプリキュアの相手をするわ、まずは実力を調べてくるわね。」

タイフン「期待してるわよスコール！！」

スコールは姿を消した。

・
・
・
・
・

夏樹「・・・・・・・・・・」

冬美「・・・・・・・・・・」

夏樹と冬美は教室で時に頭を抱えペンで何かを書く。
そして教室に学校のチャイムが響き渡った。

夏樹「ふう〜。」

冬美「終わったあ♪」

今日は学校の定期試験だった。
それからやっと解放されたのだ。

冬美「夏樹い〜♪」

冬美が夏樹に抱きついた。

夏樹「うわぁ！？急に何！？」

冬美「私頑張ったよ〜♪50点は確実だよ〜♪」

夏樹「（あれだけ教えて50点！？）よ、よく頑張ったわね・・・」

冬美「というわけで遊ぼ♪」

夏樹「う、うん・・・」

夏樹と冬美は下校途中CDショップに寄った。

冬美「♪♪♪」

夏樹「あ、欲しかったやつあった。」

夏樹はあるCDを手にとる。

冬美「なんのCDい？」

夏樹「ちよっ・・・」

『恋の道は永遠に〜ETERNAL・LOVE〜』

夏樹が手にしたのはラブソングだった。

冬美「ロ、ロマンチック〜♪」

夏樹「うう・・・隠してたのに・・・」

夏樹と冬美はとりあえずCDを買い帰宅する。

夏樹「ただいま〜。」

夏樹の母親が出迎える。

母親「お帰りなさい、ちよっと買い物行ってくるから留守番お願いね？」

夏樹「は〜い。」

・・・

夏樹はシーズフォンの機能を確認していた。

夏樹「新しい力が手に入って・・・もしかしたらまた新しい力が手に入ったりする？」

サミー「わからないサミ。」

さすがに夏の国の妖精でもわからないようだ。

夏樹「そっかゝ・・・」

夏樹は暇に感じたのか、冬美にメールを送った。

『今暇？ シーズフォンの機能について調べてたんだけど何にもわからなくて・・・何かわかった？』

夏樹「送信・・・っと。」

10秒後

夏樹「返信速っ！？ しかも長っ！？」

『全然わかんない（。□。；）でも夏樹って真面目だねえ、偉い（ゝ▽ゝ頑張ったで賞を贈呈しまゝす♪でも新しい力手に入れたし心配ないんじゃない？』

夏樹「前向きすぎない？（汗）」

そんな冬美の前向きさに安心したのか夏樹はシーズフォンの機能確認を中断した。

・・・

翌日

冬美「うつ・・・うぐっ・・・」

夏樹「ちょっと冬美いいかげん元気だしなさいよ。」

冬美は何故か号泣していた。

冬美「だって・・・だって・・・49点なんだよ!?!理想の50点まであと一歩だったのにいうえええん!!」

冬美は夏樹に抱きつく。

夏樹「もう・・・」

すると

???「あなた達がプリキュア？」

夏樹、冬美「えっ!?!」

夏樹と冬美が後ろを振り向くと緑色のローブをはおった女がいた。

夏樹「『アラシン』?」

サミー「じゃ、邪悪な気配サミ!?!」

ウィミー「『アラシン』ウィミ!?!」

冬美「ま、まずいよお!?!変身変身・・・」

しかし

「??? 「安心なさい、今日は戦いをしに来たわけじゃないから。」

夏樹「え、ええ?」

「??? 「私はスコール、『アラシン』の幹部よ。」

冬美「イナズンだけじゃないの?」

スコール「ええ、他にも私を入れて三人、そして首領のタイフン様がいるわ。」

冬美「そんなに・・・」

夏樹「ち、ちよつと待って!? 何で教えてくれるの?」

スコールは答えた。

スコール「あら、良いじゃない・・・これから戦う事になるんだから・・・じゃ、楽しみにしてるわね。」

スコールは姿を消した。

冬美「うそ・・・まだ幹部がいたなんて・・・」

すると夏樹は

夏樹「大丈夫、冬美昨日言ってたじゃない・・・その時はその時って!」

夏樹は冬美の昨日のメールの事を話した。

冬美「あ、そうだったあゝ頑張ったで賞贈ったんだよねえ♪」

夏樹「（あんま嬉しくなかったけどね。）そ、そうだよ!! だから私達も頑張ろう!!」

冬美「おゝ♪」

ふたりは『アラシン』と戦う決意を改めて固めた。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9806z/>

シーズンプリキュア!!

2012年1月9日23時48分発行